

るが、以下の例話は殆んどが皆現世に悪行をしたその報の結果として、畜生に生れ、それを知って助ける話である。いづれも皆現世における悪業が死後畜生に生れるという、寧ろ目撃者の談話の例証としたものである。こゝでは宿業ということを現世の悪業の結果、死後畜生に生れるにいう畜生だけとっているが、いづれしても小説類集宿に宿業の名目をつけるまでになつて中心仏教の展開を知るべきである。

窺基作と伝えられる阿弥陀経疏 について

村 地 哲 明

本書はその奥書によれば、唐の大中七年(八五三)に福州開元寺の常契が、本邦の円珍に伝えたものという。しかし承和六年(八三九)に帰朝せる円行(七九一—八五二)の「靈巖寺目錄」にすでに記載されているから、まず円行によって伝えられたものであらう。そして新羅義天の「教藏総録」・藏俊の「注進法相宗章疏」・覚明房の「長西録」等では、窺基作として記録せられている。しかるに東大寺円超の「諸宗章疏」や、興福寺永超の「東域伝灯録」には、この疏の文義が窺基の他の著書と異なるため、慈恩の真撰として容認することに疑問を懐いて、真偽は未定とされているのである。近頃では、佐々木月樵師(支那浄土教史)二五七頁・二六一頁)は慈恩の「大乘義林

章」の仏身仏土義と本疏との所説を対照するに、二著の教義が一致することから真撰説を採用せられている。望月信亨博士は「浄土教之研究」においては、窺基の真撰説を肯定されているが、「支那浄土教理史」(一九九頁)では、四種浄土の分類等は、かの「大乘義林章」等の説と異つておらぬけれど、その釈風が他の窺基の書に類せず、また師支婁の新訳を註釈せず旧訳を用いていることは、彼の真撰ではなからうかと疑問を述べておられる。

かように真偽の論説が示されている本疏をその内容について研究するに、まず引用経論においては六十六経十七論であつて、すべてで八十三部という数多い経論が依用されている。しかしながら「唯識論」・「瑜伽論」・「顯揚論」・「対法論」等の、法相宗関係の重要な諸論が引用されていないのである。また引文中に「解深密経」の説として、三地の菩薩にして始めて浄土に往生する説が、この経文は漢訳の「解深密経」になく、「瑜伽論」第七十九に顕わされる義であつた。すなわち「瑜伽論」に説かれる義を「解深密経」の説であると誤つて叙説されているのは、窺基作に非ざることを逆証するものであらう。つぎに本疏では、真諦の学説が十二回に亘つて引用され、流支説は三回、波頗説が一回引用せられているが、支婁説は少しも見られないのである。このように支婁説が依用されずに、真諦の弘通せる撰論仏教の系統であることを示すものである。また本疏の註釈の特徴として、弥陀の浄土の莊嚴を積するについて、「撰論」の十八円浄中の九種円浄に配釈しているのである。かゝる解釈の仕方から考えると、これも窺基作とするより

は、撰論系統の師によって述作されたものと観察することが妥当なようである。

製作の年代については、懐感の「群疑論」の教学と比較するときは、前のようである。また「称讚浄土経」を引用するに際して、新訳の語を用いていることから考察すると、此の経の翻訳（永徽元年・六五〇）後、程近い時期である初唐時代に製作せられたものと推定せられる。しかし著者については、今の処は不明である。

唯識にたいする反駁と応答

安 井 広 濟

世親の「唯識二十論」の初めに、唯識説にたいする次のような反駁がある。

若識無_レ実境_一 則_チ処_ト時_ト決定_ト
相統_レ不_レ決定_ト 作用_レ不_レ成_ト

この反駁は、若しかりに、すべてが唯識であり、われわれの認識するところに、実際の対象（実境）がないならば、①対象が一定の場所に決定して存在すること、②対象が一定の時間に決定して存在すること、③対象が一個人の意識の流れに決定されずに存在すること、④対象が作用をなすこと、以上の四つが成立しない、という反駁である。したがって、この反駁は、われわれの日常世俗の經驗的な認識の事実にもとずいて、対象の客

觀的實在性を主張する反駁であるといつてよい。われわれの常識的な經驗的認識によるかぎり、すべては、われわれの心から顯現した単なる觀念的存在でなく、①われわれの心から独立した一定の場所に存在し、②一定の時間性をもっており、③その存在は主觀的な個人的存在でなく万人の認める普遍的な存在であり、④現実的な作用をもっている。われわれの經驗的認識によるかぎり、対象が心の顯現にすぎないという唯識の立場は、いかにしても承認されない。対象は、われわれが認識すると否にかかわらず、われわれの認識に先立って存在する客觀的な存在であり、われわれの認識は決して対象をうみだすが如きものではない。唯識にたいする右の反駁は、このような、われわれの日常の經驗的認識の立場からなされている反駁と認められる。したがって、右の反駁は、經驗的な認識の立場にたつて、対象の客觀的實在性を主張する實在論者よりの反駁である。だから、この場合、唯識説は實在論にたいする觀念論とみなされているわけである。

しかし、唯識説は實在論にたいする単なる主觀的な觀念論といふべきものではない。右の反駁にたいし、世親は次のように応答している。

処_ト時_ト定_ト如_レ夢_ト 身_ト不_レ定_ト如_レ鬼_ト
同_レ見_レ膿_ト河_ト等_ト 如_レ夢_ト損_ト有_ト用_ト

この世親の応答は、すべてが唯識であっても、①②対象が一定の場所と時間に存在することは、あたかも、夢におけるが如くに、成立し、③対象が一個人の意識の流れに決定されずに存在することは、あたかも、多くの餓鬼が同じく膿の河を見るが